

令和3年白老町議会人口減少に対応する政策研究会会議録

令和3年1月13日（水曜日）

開 会 午後 1時30分

閉 会 午後 4時00分

○会議に付した事件

政策研究懇談会（白老町地域おこし協力隊）

隊 員 林 啓 介 君 隊 員 鄭 延 雪 君
隊 員 手 塚 日南人 君 元 隊 員 菊 地 辰 徳 君

○出席委員（8名）

座 長	大 淵 紀 夫 君	副 座 長	佐 藤 雄 大 君
委 員	西 田 祐 子 君	委 員	氏 家 裕 治 君
委 員	久 保 一 美 君	委 員	長 谷 川 か お り 君
委 員	貳 又 聖 規 君	委 員	森 哲 也 君

○欠席委員（なし）

○職務のため出席した事務局職員

事 務 局 長	高 橋 裕 明 君
主 査	小 野 寺 修 男 君
主 任	村 上 さ や か 君

人口減少に対応する政策研究会（第11回）

【調査事項】

事務調査：人口減少に対応する政策研究「若者定住」について
政策研究懇談会

次 第

1. 開会（司会：佐藤雄大 副座長） 13:30～
2. 挨拶（大淵紀夫 政策研究会座長） 13:35～
3. 懇談（進行：大淵紀夫 座長） 13:40～
（白老町地域おこし協力隊）

(1)私の仕事内容 13:40～14:10

参加者

隊員 林 啓介 氏 ・ 鄭 延雪 氏 ・ 手塚 日南人 氏
元隊員 菊地 辰徳 氏

○菊地元隊員 移住して4年目になる。協力隊の活動を始めて半年経過した頃から、宿泊施設開業の準備を始めた。社台で馬3頭を育てている。専門は環境関係である。

○林隊員 民泊体験ツアーと民泊をしている。アドベンチャーではなく、暮らしに身近な面白いことやおいしいものを楽しむ体験ツアーをしている。今はオンラインでも取り組んでいる。

○鄭隊員 駅北インフォメーションセンター（ポロトミンタラ）で観光案内をしている。今の仕事は、コロナの関係があり、外国人ではなく日本人相手のインフォメーションが多い。一番多いのは食べ物や日帰り温泉に関する問い合わせである。白老は札幌から近いので、ウポポイを目当てに来てくれる人が多い。今後は様々な情報を動画にして発信していきたい。将来は自分の店を開きたい。そして、中国から自分の両親を呼んで暮らしたい。

○手塚隊員 協力隊の活動は3年目である。ポロトの森のガイドをしている。インバウンドだけではなく、アウトバウンドにも目を向けようと考えている。商品開発にも取り組み、ECサイト（オンライン）で販売する予定である。活動内容を動画で公開していく予定である。

(2)なぜ白老町を選んだか 14:10～14:45

①白老町の状況（良いところ、適性、活用等）

②将来の展望（こうしたい、可能性等）

○菊地元隊員 馬術の関係で東京から岩手県遠野市へ移住して暮らしていた。白老には5年前にみらいづくりプロジェクトがきっかけで訪れた。そのときまで白老町を知らなかった。馬で有名な社台が地名であると始めて知った。そこから白老で馬を育てることを考えるようになった。妻と子供と下見をして、家族会議で移住を決めた。子供が保育園であったため、移住を決断しやすかった。移住には子供の教育が障壁になると思う。簡単な手続きで転校手続きができれば移住しやすいと思う。

○林隊員 知人から魚釣りの名目で誘われ来町した。実際はまちづくり関係の取組で呼ばれており、2017年に多文化シンポジウムに講師の一人として妻とともに参加した。白老がまた訪れたいまちになった。生活の拠点を決めるため、ロシア南部とどちらにしようか迷った。白老は自分たちが暮らすようになればできることがあると思った。まちの暮らしを疑似体験する機会を提供出来たらと思った。野菜づくりなど白老の暮らしを体験してもらうことで喜んでくれる人がいる。

○鄭隊員 学生時代にお世話になった人から白老の話聞いた。その後町内で暮らす場所を見つけ、夫の仕事の紹介を受けて、白老での暮らしが始まった。それまでは大きなまちで暮らしていた。白老は歩いていろいろなところへ行けるよいまちである。土日のどちらかは仕事で、子供の面倒を見るのは大変である。保育園の先生がとてもやさしい。白老は学校で人が少ない分、一人一人が大事にされるのがよいと思う。

○手塚隊員 大事な部分とつながれない気がして、東京暮らしが息苦しかった。森と触れ合いたいと思うようになった。苫小牧にあるいぶり自然学校で研修を受けることにした。アートコミュニティに行きたいと思い、白老へ来た。森も川も湖もいっぱいある。河庄によく通うようになった。いろいろなものを採って食べることはすごいと思った。キャリアがなく、何ができるかわからないが、何かの役に立ちたいと思った。会話が早いほど情報が得られる。「何かしら」をやってみたくてますます思うようになった。今つながっている人と何ができるのか。白老に居続けるかはまだわからない。

○長谷川委員 インターネットで行う体験ツアーとは何か。

○林隊員 オンラインで魚のさばき方やお茶の入れ方など、画面のこちらと向こうとのやり取りをする。多言語で世界中へ発信している。内需（来てもらう）は限度があるが、外需（出していく）は限度がない。

○西田委員 菊地隊員は環境分野が専門と聞いた。地元の人には白老の何が魅力なのか分からないことが多い。

○菊地元隊員 専門は環境影響評価で、外国で働いていたが、その後日本で経営戦略と環境を融合する仕事を経営コンサルの一環でするようになった。仕事はプロジェクトベースのため、必要な時だけ東京に行けばよい。白老は空港が近く、湿度が低く、馬を育てるのに適している。

○西田委員 今後インバウンドに向けての取組はどうなのか。

○菊地元隊員 持続可能な認証制度が今注目されていて、イオンの販売で実施されている。天然のものを獲り調達する。これからは環境に配慮しなければ経営が出来ない。飼育基準も必要になってくる。町内の畜産は海外飼料に大部分を頼っていると思う。第1次産業との関わり方が重要である。

○大淵座長 白老町の若者定住について大きなウエートを占めている教育についてはどうか。

○手塚隊員 いぶり自然学校に通うため、こちらへ来ようと思った。子供だけでなく、そのほかの人も学べる場があることが魅力である。自分をサポートしてくれると安心した。起業の可能性も感じられた。

○林隊員 子供がいない家族や子連れの家族の来町がある。移住先を探している人もいる。地方にいてもプラットフォームは整うだろう。この地域は何の科目、分野を伸ばせるかが大事である。勉強はオンラインでもできるが、それ以外のことはその地域の特色にかかってくる。教育のコンテンツとして大人も子供も学べるものをまちから生み出せるだろうか。

○菊地元隊員 教育は差別化が大事である。それがなければどこにいてもよい。豊浦町のシュタイナー教育など、ほかにはないものがあり、場所に関係なく仕事をする家族なら、そのような所を選ぶだろう。町内の中学校、高校で馬術部があればよい。牛と馬の成育環境は共通している。馬というニッチ（小規模）な分野で掘り下げることができると思う。

(3) 白老町の若者定住策について（促進策等） 15:00～16:00

○菊地元隊員 馬のセカンドキャリアにJRAが取り組むようになった。ゆりかご（繁殖牧場）はあるが墓場はない。このような部分に取り組むと雇用が生まれるのではないかと。課題と課題の掛け合わせによる問題解決が、地域課題の補完として必要なのではないかと。転出転入等の住所変更はハードルが高い。関係人口を増やすため、「第2住民登録」といった制度をつくって、住民サービスが受けられるようにしてはどうか。広域で検討する方法もある。

○貳又委員 協力隊は若者定住に効果はあるのか。

○菊地元隊員 効果はあると思う。まちが3年間全力で応援してくれるのであれば、個々の力に頼るより、個々の希望をバックアップするようなサポートをしてもらうことが望ましい。

○貳又委員 協力隊に求める出口の設定はあるか。

○菊地元隊員 設定するならそれでもよいし、フリーでもよいと思う。

○手塚隊員 協力隊はまちのことを深く知ることができる活動である。人が人を呼ぶ。これまでつなげられなかったものへつながるように、あるいはつながりごと引っ張ることもできる。できるだけチャンネルは多い方が望ましい。起業するというミッションは情報が必要である。そのため、ま

ちとして情報の窓口が必要である。

○大淵座長 若者が住み続けるためには、まちの人は何をすべきか。

○鄭隊員 大きなまちに行きたい気持ちがある人がいる。白老はどんなところで何ができるかSNSを活用して発信し、町民はそれをシェアして拡散する。修学旅行のように移住ツアーが2泊3日くらいでできるといい。白老町就職ナビがあれば若い人には特に便利である。就職やバイト、起業のサポートを体系的に示してくれると助かる。

○林隊員 関係人口というキーワードからいえば、定住される必要があるのかは非常に疑問である。まちにメリットがあればそれを見せることである。策は内側の人が内側のことを知ることである。まちにウポポイが出来て100万人の来場を目指すことは大事であるし、「ちょっと遊びに行こう」という人を増やすことも両方大事である。関係人口は人と人のお付き合い。そして、暮らしのイメージ。最初の一步は何であり、そこからのイメージを広げること。来てもらいたい人はどこにいるのか。ご近所付き合いの感覚である。2拠点、3拠点の一つとしてまちを選ぶという新しい考え方が生まれてきているのではないか。白老に関わっている人が他の人につないでくれることを期待できる。

○氏家委員 これまでの議論は若い人を呼び込もうという考えに終始していた。元々あるものに対する価値観やあるものを生かすことなど、様々な要点があると思うが、なかなか形に出来ない。まちの魅力を商業ベースに乗せようとあまり思ってこなかった。何をしたらよいか、何が必要なかが分からずに来た。媚びを売ることなく、どこにでもあるまちにせず、まちの魅力を見直して、柔軟に考えたい。ここ数年はウポポイが出来たくらいで、ほかに何が変わったのだろうかと思ってしまい、変化をつかむことが出来ずにいる。

○手塚隊員 まちづくりは一緒に取り組んでいく姿勢が大切である。人の集まりからアイデアが生まれるものである。批判が生まれるというのはまちのカルチャーなのだろうか。「君は定住してくれるのかい。」のまなざしが辛いときがある。

○氏家委員 行政との付き合いにくさは、職員が行政の仕組みの中で働いているからである。一方で議会にはその類のしがらみはなく、何かを動かす力があると思っている。議会の後押しにより動きが始まることもある。議員は様々なことを考えてまちづくりに生かしていかなければならない。

○西田委員 情報窓口が欲しいとはどのようなことか。

○手塚隊員 カフェのようなもので、開かれていて、何かがあって、誰かがいて、まちのことが分かる場所をイメージしている。そこにいる人に話したり聞いてみたり。学校の保健室など駆け込み寺のような感じである。既存のカフェを生かすなど方法があるのではないか。

○林隊員 コンセプトや運用がしっかりつくられること、中身を磨く機会を増やすことが重要である。人伝いの情報や、どこに行けば誰に会えるというようなことが分かるネットワークが必要である。

○大淵座長 定住してもらおうとするより、関係人口を含めたまちの在り方を探るほうがよいのだろうか。

○林隊員 最初は定住を考えずに白老に来る人もいる。将来は2地域を同時に動かしていくのかもしれない。出て行った後の関係人口も大事である。人生の一コマをここで過ごせたらという思いの人もいる。

○長谷川委員 グローバルな人は定住という固定観念がない。

○貳又委員 定住しなくても、その人が白老と関係があり、その後、白老へ呼び込む活動があればそれでよいのだと。町としての政策展開が変わっていくだろう。

○鄭隊員 W i - F i 環境が必要である。それは外国人ならではの壁である。そして車がない。

○林隊員 このような懇談は貴重な機会である。協力隊になってもうすぐ3年である。沢山の方にお会いしてきた。自分たちの活動を振り返る場になった。今後はどうしようかとも考えられた。

○鄭隊員 またこのような場にぜひ呼んでほしい。